

小春日

三 井 芙 蓉

霜月。漱石の所謂「人は借金のあるのを忘れ、猫は鼠を取るのを忘れる」と言つたやうな何となく、春が再び返つたやうな、温たかい日が、何日もく續く、櫻や梅等色々な草木が一時に咲くかと思ふやうな暖かさ、是を小春日と言ふ、子供達は藁葺屋等の温たかい日向に集まつて泣いたり笑つたりして遊んで居る。

頭の上を、すーつと、かろく渡り鳥が羽音を殘して澄んだ空を横切つては彼方に消えて行く。畑打つ若人達の鍬がきらりきらりと日を照り返して目を射る、家では留守居の老人は鼻水をすーりながら孫の守でもして居るのだらう。

縁側の日あたりに寝て居た猫がのつそりと起きて春伸をやつて居る、頭の上を赤とんぼの馬鹿にしたやうにとんで居る背戸の方では鶏が長閑な聲で鳴いて居る。

今日あたりは日光碓氷等では紅葉狩に杖曳く者が多いだらう四方の山々は恰も蒔繪を見るやうだ。

珠數屋訪ふ人善根や秋晴るゝ 會左運

旅にもちて讀まぬ一書や秋の風 井泉水